

令和6年度 幼児教育研修（年齢別担任研修2歳児・第1回）

「子どもの発達と保育者の関わりについて」

～2歳児の世界に寄り添い楽しむ～

日時：令和6年6月4日（火）15:00～17:00

会場：足立区勤労福祉会館

講師：相模女子大学 教授 金元 あゆみ 氏



寄り添うとは何か？

2歳児の発達とそこにかかわる保育者のあり方とは？



自己主張する子どもの姿を楽しみながら
気持ちに寄り添って保育を進めたい



2歳児の発達

自己主張

～2歳児の自己主張は「自立」につながる育ちの姿～



自我が芽生える

- ・「自分」「自分の物」の意識が生まれる
- ・自分の気持ちを表す



自分の物や場所に執着し独占したい思いが拡大する

- ・「イヤ」「ダメ」などの言葉は、自分の意思で決めたい姿の現れであり、要求を実現するための粘り強さにつながる



自立と依存の気持ちが揺れ動く

- ・様々な要求は、身近な大人への信頼の証
- ・受け止めてもらえる安心感は、他者の思いへの気付きとなる

1歳頃

2歳頃

あそび

～「自分」「自分以外」と出会い、問いかけの連続の中で自己を築く～

こうするとどうなる？



探索あそび→環境との対話

- ・自分の心の声に耳を傾ける
- ・相手の心の声に耳を傾ける
- ・試しながら関わり方を知っていく

模倣あそび

→「いいね」の取り入れ

思考・言葉

→知的好奇心が高まる
「これなあに？」と盛んに質問する

ごっこあそび

・何かに見立てながら遊ぶ
→表象の獲得
→象徴機能の発達



- ・やりたいことや、やりたいがうまくできないこととの葛藤の中で、思いの伝え方や関わり方を知る

Q 子ども同士のトラブルをどう捉えるか

平行遊びが盛んな時期。同じ遊びをしているようでも
気持ちは自分が中心である。

物の取り合い

「それ、いいね」と、相手の行為に善さを感じたり、相手の物や行為を取り入れたりすることで、相手を感じている面白さを知ろうとしている。



トラブルも育ちとして捉える。

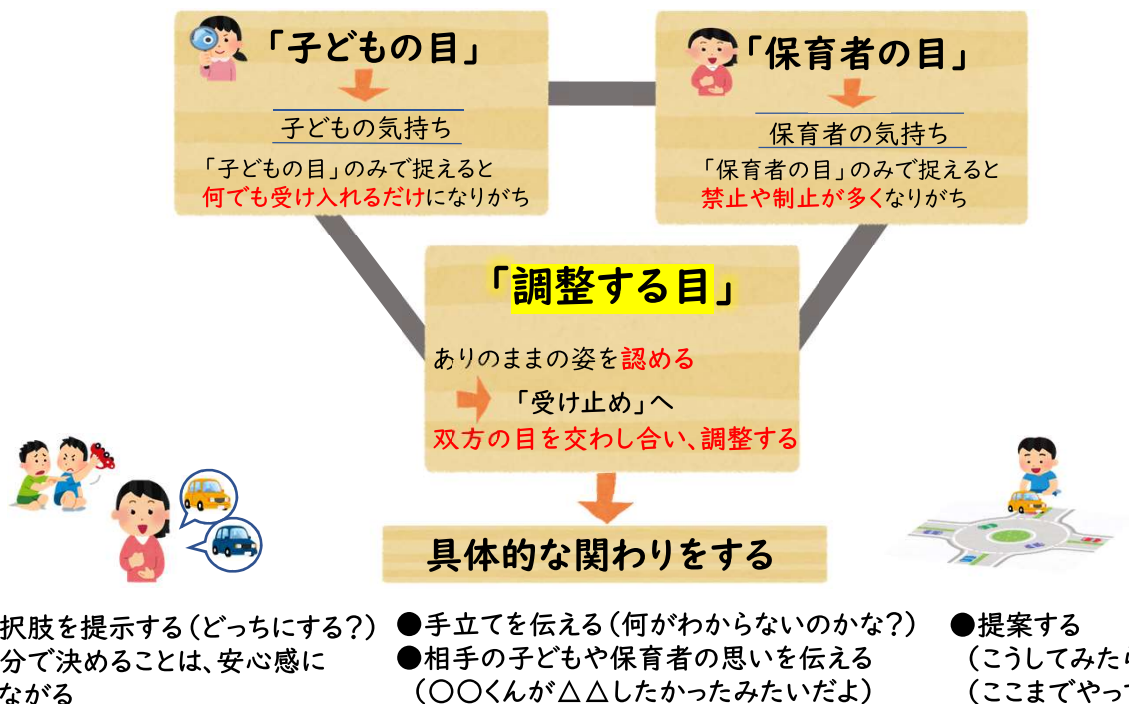
相手にも気持ちがあることを知る、自分の気持ちの伝え方を知るチャンスである。



保育者のかかわり

子どもに寄り添うとは? ～保育を見る「3つの目」～ (鯨岡, 2004)

子どもと保育者は共に「主体」 子どもと対話しながら、共に保育を作っていく。



環境の工夫

★ やりたい遊びを選べる環境 ★ 互いの遊びが見える環境 ★ 遊びが邪魔されない環境

いろいろな玩具で遊べる工夫をする

遊び方がわかりやすいもの
いじっているうちに遊びに導かれるもの
ままごとなど素材を組み合わせて遊ぶもの

- ・質的に異なる玩具を点在するように配置してみる
- ・子どもが出し入れしやすい位置に置く

動と静のスペースを使い分ける

ダイナミックな遊び
(電車を長くつなげる、大型積み木で大きな形を作る等)
静かな遊び (紐通し、パズル、お絵描き等)
ごっこあそび

- ・自分のイメージでじっくり楽しめるコーナーがあると、その時々で気分で行き来できる
- ・他のコーナー遊びも目に入るようにすると、互いに意識し合う



研修生の報告書より

○2歳児の自己主張の大切さを学ぶことができた。「自立」と「依存」で揺れ動くこの時期に、保育者に求められている役割とは「頼れる、甘えられる」存在になることだと実感した。子どもの要求を受け入れるポイントとして子どもの姿をよく見ることが大切であり、「子どもの姿に聞いていく」という言葉が印象に残った。

○子どもの表面的な要求と本当の願いや訴えは違うこともある。保育者は子どもたちの姿を予測し、「受け入れる」のではなく「受け止める」こと、子どもの視線やしぐさ、表情などから本当の願いを見付けることが大切であると学んだ。